

第5回福岡女子大学の抜本改革に向けた準備委員会議事録（要旨）

- 1 日時 平成22年5月14日（金） 14:00～16:00
- 2 場所 ホテルレガロ福岡 カトリア
- 3 出席者
海老井委員、大谷委員、梶山委員、川島委員、河部委員、坂本委員、添島委員、高木委員、中川委員、中津井委員、西田委員、松田委員
- 4 会議の内容（次第参照）

（委員長）

それでは準備委員会を開催する。

これから議事に入る。新学部設置認可申請の進捗状況について、事務局より説明をお願いする。併せて、文部科学省での事前相談の内容についても報告をお願いする。

（事務局）

今月末に文部科学省に新学部の設置認可申請を行うが、申請する内容のポイントをまとめている。

最初に大学名称。検討の結果、現在の名称である「福岡女子大学」のままでもいいかと思っている。

次に学部名称。これは「国際文理学部」とした。他の学部名や「文理は古い」という意見があったが、一方で、「今の学生にとっては、逆に新しく聞こえる」という意見もあり、「国際文理学部」ということにしている。

次に入試区分と募集定員。留学生特別選抜の定員については、20人という定員を設定した。また、一般選抜試験のほか、2回の推薦入試を行う。

教員組織については、78名となる予定。（学長と助手は除く。）そのうち、外国人の先生が15名。国籍を見ると、中国3名、韓国3名、アメリカ3名、カナダ2名、イギリス、ドイツ、スリランカ、ニュージーランド各1名になっている。女性の先生は36%強。

学部の理念、目的、特色は、基本計画に沿って作成されており、従来と変わっていない。

新学部開設までのスケジュールだが、申請後、大学設置審査会の審査が行わ

れ、その結果伝達が8月の上旬頃。その意見に応じて補正を申請するのが9月の上旬から中旬頃。順調に進めば10月末に設置認可が下り、その後、学生の募集活動を行うという流れ。

各学科のカリキュラムは、就任いただく先生方と個別の打ち合わせをしながら決定している。

文部科学省との協議経過だが、現在、文部科学省から「国際教養学科と食・健康学科がどうして同じ一つの学部の中にあるのか。その事で、他の大学の栄養系の学科とどう違うのか。これは珍しい組み合わせなので、きちんと説明できるようにしておかなくてはいけない。」という意見を頂いている。その上で、「3学科共通の科目、専門基礎のところでの共通科目がある方がいい。」という意見もいただいた。そのため、学部共通専門科目という枠を設け、14科目を位置付けた。

「学部設置の趣旨等を記した書類」では、1学部の必要性を述べ、その後、この3学科で構成する理由として、「3つの分野で取り組むが、それぞれ独立したものでなくて、相互に密接な関係があり、3学科の協力によって、より効果の高まりも期待される」と説明しており、文部科学省からの意見に対応させている。

(委員長)

何かご意見があるか。

(委員)

学部学科の再編ということではなく、やはり新しい学部を作るということを基本に立てることが大変重要。「新しい国際性のある教養学部を作る、それは文理統合が必要」ということを最大限打ち出す。そうすると、この3つの学科があることの意味が出る。

(委員)

何でこの3学科で構成するのかということが、文部科学省は気になるのだと思う。環境と食・健康は、世界的な問題。それをやるためには国際的な資質や教養が無かったらやれないということで主旨を展開したらどうか。

次に、文部科学省は何も言っていないが、「なぜ女子大で教育するのか」という観点が必要。女子大という教育の場で、非常に新しい国際教育の概念を作った方がいい。「女性だけの大学でこれをやる」という意義を書いておく必要がある。「女子学生に如何に国際性を涵養する教育をするか」という理念を持つておくこと。男女共学の教育と、女性だけの場合の教育は変わると思うので、それ

を謳い文句にすればいい。女子大学で、「国際」と「食と健康」と「環境」を謳っているところは世界にあまり無いので、それを売りにしたらいい。

(委員)

文部科学省の担当者がどういう言い方をしたのかが気になる。

(事務局)

文部科学省の言い方としては、食・健康学科について、「別の学部にはできないか」という表現があった。そこで、どういう視点で統合して1学部を作るのかという説明文を載せた。「3学科が協力することが重要であること」、「文系・理系の垣根を越えて協力すること」を明らかにし、具体的に規定するものとして学部共通基盤科目、それから各学科の共通基礎科目として学部共通専門科目を設けた。これが3学科に共通する核の科目になるのではないか。

(委員)

共通科目としてこれだけでは弱い。今回の改革の色々なコンセプトが反映できてない。これは学生が取らなければいけないようになっているのか。

(事務局)

選択制。

(委員)

選択ならば、取らないで卒業していく可能性も出てくる。そこをつっこまれた時にどう答えるのか。科目が並んでいるが、「コンセプトは何なのか」と聞かれたら、どう答えるのか懸念する。

(委員)

この学部共通専門科目はテクニカルな科目であって、その3つの分野が融合して新たな領域を作るような匂いがほとんどしない。

(事務局)

この改革の理念は、3つの分野を統合して学ばせることであり、1学部1学科というのはまさにそれだったと思う。その理念そのものはきちんと確保しているつもり。総合科目はリレー形式で、3学科のものが合同で、多角的な学びを実現する、一番象徴的に現れている科目だと思う。3学科を統合する部分については、学科の内容について、共通基盤のところそれぞれの特徴を語って

もらい、それを全学生が学ぶという形で、広い分野の知識を学ぶ。そして進んでいく段階で、興味や必要に応じて、学科の垣根を越えて、関連する科目を学んで行く。それを教員側が指導しながら、卒業研究で完成させる。全体の理念として、文理統合というのは実現しているが、形として、それがなかなか見えにくい。我々が学科の垣根を越えた学びで文理統合を実現しようと思っていることについて、文部科学省からは「それはオプションではないか。基本的に学びというものは学科で完結するものである。したがってその学科の学びにおいて、その文理統合という概念が実現する様なカリキュラム編成になっておかなければならない」という指摘を受けた。よって、各学科に学部共通専門科目を置くことによって、学科において文理統合を完結するものを用意した。

(委員)

この問題は、相当踏み込んで持って行ったほうが良い。きちんとシステム化しないと。少し踏み込み過ぎたと思うくらいに踏み込んで、統合性を作り出した方が良い。共通専門のグルーピングを作ることは、これまでの議論から一歩前進。これを学生に取らせないと駄目。文のグルーピングと理のグルーピングくらいはきちんと分けて、交差して何単位は必ず取りなさいという仕組みを作る。「どうやって取らせるのか？」と質問されたときに答えが出てこないようでは駄目。それと、文系の方の科目が少し希薄だと思う。

(事務局)

補足する。まず文理統合の件だが、文系は理系の科目を、理系は文系の共通基盤科目を取らなければいけないという制度設計になっている。例えば、国際教養学科の場合は、共通基盤科目20単位のうちの、自然科学は6単位としている。ご指摘のように、融合にはなっていない。融合と統合という二つ言葉があるが、無理に融合しようとは考えていない。

文部科学省の指摘は、共通でやる分は良いが、学科は学科で独立すべきであるという点。そこで、文部科学省に説明したのは、自由選択科目で、他の学科を取れるようにしているという説明をしたところ、「他の学科のつまみ食いをするような取り方は良くない。学科の中に置きなさい」という言い方をされた。私たちと考え方が違うが、学科の中で完結させるために、一つの方策として、テクニカルに全ての学科に置くという方法を取らざるを得なかった。

(委員長)

いかにその3つの学科を一つの学部に融合させるのか。そして、それに対応したカリキュラムになっているのか。そのカリキュラムを実際に取得可能であ

るのか。それをまた、なぜ女子大学でやるのか。非常に核心的な部分で議論が進んでいる。5月末日に申請なのでそう時間がない。ここでいろんなことを出していただきたい。

(委員)

学部共通専門科目を見たときに、ここの女子大で、文理統合で、国際化をする場合のイメージが湧かない。例えば、「社会調査法」であれば、「アジアにおける食の何とかなについての社会調査」とか、サブタイトルまたはテーマをつけてほしい。

(委員)

例えば、環境のところを見ると、国際というのがわかりにくい。専門科目の中に国際関係の科目が入っていると思う。国際、食・健康の学科であっても、環境の学科であっても「国際関係科目を何単位以上取る」というのを明確に書くことが重要。

(委員)

次世代の女性のリーダーの養成を示しているのはとてもいいことだと思う。アメリカのヒラリー・クリントンも女子大出身である。世界で活躍される方も、女子大出の方にリーダーが多い。女子大という環境は、共学と違って、リーダーである人材を育てやすい。女子大を売りにしていくのも大事な点。それでカリキュラムを見て、どこが女性リーダーを育成する科目になっているかよくわからない。たとえば、リーダーシップ論であるとか女性リーダー論であるとか。

(委員)

私の申し上げたいことは、「見えるようにした方が良い」ということ。もう一つは、「カリキュラムポリシーと大学のミッションがどれだけ合っているか」ということ。理論武装をされた方が良い。

(委員長)

認可申請の内容について、他にはないか。非常にたくさんの重要な指摘を頂いたので、十分に整理して検討していただきたい。

次の意見交換に入る。まずは、「留学生確保の方策」について説明をお願いする。

(事務局)

一般留学生は、国内の日本語学校で学んでいる学生の募集、海外での直接募集、この2種類の方法を考えている。今まで経験がないので、海外については大変難しい。本年4月から国際交流センターの人員を充実させた。現在、海外において日本語教育を行っている高校の訪問を検討している。国内については、日本語学校に接触をして、優秀な学生を確保する作業を進めている。

交換留学生の方だが、海外の有力大学との提携を進めている。そこを中心として、若者文化をテーマとした半年間の特別プログラムを今秋から実施する。これに対して各提携大学から三十数名応募があり、昨日25名に絞り込んだところ。

(委員)

各国の高校の日本語履修コースからというのは、日本の各大学が、相当強烈に動き始めているから競争が極めて激しい。県からのいろいろなサポートもあるし、有利な条件もいっぱいあるので、コンタクトを早くとらないといけない。福岡県留学生サポートセンターとはっきりと大学が協定を結んだらどうか。公式にやらないと、人脈だけでやっても、なかなか動かない。

日本語学校だが、福岡市には相当優秀な日本語学校があって、もう全国から引き合いがきている。きちんと協定を結ぶなりして、はっきりとした約束にしてルートを作られたらいかがか。そうしないとなかなか見えてこない。

(事務局)

留学生サポートセンターへは、学長が近々行って、話を進めることになっている。海外での募集だが、新学部の学部長予定者を中心に、作業を進めている。

(委員)

有力な日本語学校、これはとても重要。日本語学校を卒業した学生が、外国で日本語学校を運営している例がかなりあるので、利用したら良いと思う。そこで、女子大とこれら日本語学校との信頼関係だが、彼らを教えた先生が日本にいたので、その人とネットワークを作る。そうすると、優秀な人を送ってくれる。女子大への留学条件、支援体制を他の大学と比べると、非常に条件が良いので、その点を利用すれば良い。優秀で質の良い人に来てもらいたい。きちんと教育して卒業させて本国に帰すと、彼らが次の優秀で質の良い学生を送ってくれる可能性がある。そのような良い循環を作り出さなくてはならない。日本語学校も国内だけでなく、国外の日本語学校と連携するというのは、非常に重要。

(委員長)

次に、「学生寮の活用方策」について、具体的な活動内容を大学からご紹介願いたい。

(事務局)

基本的に学生寮の位置付けは、教育の施設。学生寮で、コミュニケーション、社会性、学生の主体性を培う、外国人と暮らすということで国際性を育む、というのが大きな狙い。実際のプログラム、具体的な活用方策は、現在練っているところ。また、学生寮の名称だが、名称を公募するというのも一つの手段。

学生を中心とする運営協議会を設け、学生にフロアリーダー、サブリーダーなどの役割を持たせる。この運営協議会を中心として、学生を中心に運営を行わせ、これにより学生が自主的に自らの社会性等、その目的とするものを見つけるといったシステムを作りたい。

併せて、地域への貢献。地域の方々と接触することによって、社会性を身につけさせようと思っている。

(委員)

学生寮の成功は、学生の運営委員会にかかっていると思う。学生が動いてくれないと機能しない。だから、先生方に見れば不安になるくらい、学生に任せたい方がいい。そうして盛り上がると、かえって不祥事も起こらずに行く。

(委員)

今すでに寮がある。レジデンスアシスタント的な上級生を全く新しく作るのではなく、すでに在校生がいるので、トレーニングしていくのは今からでもできる。

(委員)

今あるものに接いで何かをしようとするのではなく、全く新しいコンセプトの寮なので、今寮に入っていない人を含めて、全学生が寮を活用して楽しい有意義な学生生活の場にするということを仕切り直して考えることが必要。これは寮に入っていない人も含めての学校づくり。寮の問題は、寮だけの問題ではなく、学校をどうするかというムーブメントだと思う。

(委員)

学生が寮の運営をするということは、そのプロセスを通して、学生たちがリーダーシップを養っていくという大事な機会。

(委員)

地域との交流は非常に重要。寮と地域との交流については、学生に任せるのはよくない。まず、今、大学が地域とどれほどの交流をもっているのかが重要。それもしていないのに、学生だけでやるというのは基本的に無理がある。だから、まず大学の意識を変える、地域とどう付き合うか。その中で、学生がどう付き合うかの問題となる。

(事務局)

ご指摘は非常にありがたく受け取った。

(委員)

(地域との交流について) もう1点、大学から出ていくという話がこういう時には多いが、それだけではなく、大学内にどうやって地域の人を呼び込むか、それも非常に重要。

(事務局)

全く何もやってないというわけではない。一つ実例を挙げると、東区コミュニティユースというのがあって、福岡市東区の大学が参加し、地域の子供たちと色々な活動をしようとしている。うちの大学でやっているのは、去年からエコキャンパス活動をやっている。夏休みや大学祭のときに子供たちを集めて、環境教育や食育のカルタなどを行っている。ただし、小学校も結構忙しいので、なかなか難しい。

(委員)

「自分たちができなかったことも、そこで実現させて、すばらしい大学を作り上げましょう」と、今いる一年生がそう思うことも重要。アイデアを持っている学生がいっぱいいると思う。そういうのを企画して、「じゃあ、今からレジデンスになってみよう」と思うような人を、できるだけ早めに募集して、一緒にやっっていこうという雰囲気を作り出す。今の学生への配慮もお願いしたい。

(事務局)

貴重なご指摘ありがたい。学生が自主的に寮を運営すること、機運を高めるというのが非常に大事なことかと思う。今度の新しい寮は、自分たちで自主的

に主体的に寮を運営する、そこでいろんなことを学ぶような、学生自らが考え出すような、そういうシステムを作りたいと思う。一方で、ご指摘があったように、上級生のサポートが必要だと思う。留学生に対するサポートについては、今秋から始まる短期プログラムにおいて、今の学生の中で留学生をサポートしてくれる学生を募集し、システムを作り上げている。そういうふうに学生と教職員が一体となって、留学生および寮の運営にかかわる、そういうシステムを考えている。

(委員)

明日から、「女子大が変わるプロジェクト」なんか立ち上げたらどうか。好きな人はいっぱいいる。寮だけでなく、「大学が変わる」のシンボルが寮。それがリーダーを作る要素にもなる。

(委員)

留学生は原則寮だと思うが、ホストファミリーの仕組みはあるか。

(事務局)

構想中。

(委員)

名称を学内で公募というのは、何で学内なのか。地域に対する宣伝になるのに。だから、いつも内の目。内側にしかない。外からの目というのが非常に重要。

(委員長)

たくさんのご意見を頂き、非常に参考になる意見があったと思う。新しい学生寮は目玉なので、大いにこれを活用していただきたい。

最後の項目だが、「新学部開設に向けての広報体制」について、説明をお願いします。

(事務局)

昨年の秋に広報の組織を立ち上げて、そこに専属の事務職員を置いた。そこを中心として広報計画を立てている。

中心となるのはパンフレット等の作成。それから、オープンキャンパス説明会が重要。在校生による母校訪問も計画しており、これも大事な部分。それぞれ精力的に充実した中身で数多く予定している。もちろんインターネットを活

用した取り組みもあるが、さまざまな取り組みを通じて充実した広報を行いたい。また、広報イベントとして、秋に新学部設置に関するシンポジウムを開催したいと思う。

(委員)

直近の最大の節目は何かと言ったら、申請した時。申請したことは、県民には周知すべき。これが直近の最大の広報活動。それをどういうふうにするかというのが一つ。

それから、学生がこの改革をどれだけ認知・認識しているのか。申請した時に、在学生を集めて、「我が大学は変わる」ということをみんなに周知して、一人ひとりが広報活動の担い手になるというのが大事ではないか。

(事務局)

申請時の広報は、広報機関等へのアピールを考えたい。在校生は説明会等を開催している。申請時にも説明会を企画したいと思う。それを受けて、在校生が母校等に行き、この改革を宣伝するという取り組みも考えている。

(委員)

新聞の広告というのが非常に重要だと思う。新聞記者をいかに味方につけるか。そのためには新聞記者を集めて、いかに変わるかという説明会を開き、どう変わるか学内を案内して、長い目で新聞記者を味方につけてないと、結局報道をしてくれない。

(委員長)

これで、意見交換は終わらせていただく。
全体を通して何かあるか。

(委員)

10月の短期特別プログラムで、ベトナムなどからいろいろ留学生が集まってくる。キャンパスの中だけの活動では、もったいない。アクロスの国際交流センターもあるので、そういうところも、女子大のエクステンションスペースとして使わせていただいてやったらどうか。同じ県の関係のものだし、アライアンス（協定）をきちっとして、お互いにメリットが出るようにして。

(委員)

博多駅か天神に、サテライトを作るのがいいのではないか。県立大学なので、

利用できる県の場所はいくらでもあるのではないか。サテライトが無いのは少し寂しい。

(委員)

女子大として香椎に閉じこもってはいけない。

(委員)

学ぶ内容だけではなくて、むしろ学び方が大きく変わるということ。学び方を教えるのは教員の方々なので、いわゆるFDのあり方が大きく変わらなないと新しい学び方にはつながっていかない。変えるという取り組みも、今、やっていないと、来年四月には間に合わない。

(事務局)

学生の主体的な学びを実現するために、主体的学習支援室を設置しようとしている。学生が主体的に学ぶ仕掛けを、他県の事例を参考として考えている。

(委員)

新しい組織になって、新しい教員になって、すごくいい事だが、結局、それが外に見える形になるのは、先生がどういう態度で、学生に教育をするか。新しい女子大の場合、教育に対して、教え方がどれほど変わったのか、先生が変われるかどうかにかかっていると思う。組織が変わり、教育の内容が変わっても、今までと同じ教え方をしていたら、これは何も変わらない。死ぬほど勉強させるくらいの勉強をきちんとさせ、そのための面倒をみないといけない。そこが外部からはっきりと「あれ、女子大は変わったな」という事になる。内容も重要だが、教育のやり方とか、学生との接し方とか、これらが本当に変わらないと、外から見えないだろうと思う。なかなか難しいことだと思うが、これが成功するかしないかが鍵。

(委員長)

とてもいい言葉を思い出させていただいた。「死ぬほど勉強」。後になって本当に思い返すことが多いが、若い時はきつけれども、勉強させられた厳しい先生の方が、思い出が残っているような気がする。

(委員)

どこの高校でもこの時期に三者面談を行う。ここ1ヶ月が勝負なので、いろんな高校に告知してほしい。

入試科目の変更については、思っている以上に高校生に負担が大きいので、変更があるということは、特に早めに伝えていかないと志望者が集まらないということになり得る。

(委員長)

高校の反応はどうか。

(事務局)

今のところ、一般的に好感触を得ていると聞いている。

(委員長)

進路指導の先生と3年生の学年担任の先生の理解が鍵。

それでは、これで意見交換を終わらせていただく。今日はたくさんの貴重なご意見をいただいた。

今後の日程について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

学部設置認可申請後のスケジュールとして、8月上旬頃に文部科学省からの審査意見がくる。9月上旬頃をめどに、それに対する補正申請の提出が予定されている。この頃になると、具体的な見通しが立つと思われるので、次回委員会については、9月中旬以降の開催を検討している。

(委員長)

本日の委員会はこれで終了する。